「提督が辞める…？」

ぱすたすきい

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

◇彼女たちが徐々に病んでいく過程を描いた短編ＳＳ集。

▼西村艦隊（時雨、最上、扶桑、山城）

目次

時雨「提督が辞める……？」――――1
最上「提督が……辞める？」――――13
扶桑・山城「私たちを抱いてください……！」――――30

時雨「提督が辞める……？」

時雨「提督……そんな、嘘だよね」
時雨「行かないで」
時雨「一人は寂しいよ」
時雨「……」
時雨「……」

◇壱日目

▪マルフタマルマル
▪目が覚めた
▪嫌な夢を見ていた気がする

▪ここは……
▪病室だ
▪
▪
▪
▪そうか……帰って来られたんだ。
▪僕ら１ＹＢ３Ｈは
▪ブルネイからスリガオ海峡に出撃して、そして……
▪任務を完遂した。

▪山城は…

▪みんなは無事なのかな
▪今すぐ確認したいけど
▪全身が鉛のように重くて動かない

▪提督のおかげで、あの夜を越えられたんだ
▪提督……今すぐ会いたいよ

◇弐日目

▪マルナナマルマル
▪目を覚ますと、最上が心配そうに僕の顔を覗いていた
▪どうやら艦隊のみんなは無事帰投することができていたみたいだ
▪僕の体は……大丈夫
▪なんとか歩くことならできそうだ
▪山城と扶桑は損傷が酷くて、しばらく入渠みたいだけど…
▪でも良かった…
▪「時雨はまだ安静にしてなきゃダメだよ」
▪提督に会いに行こうと支度をしているところ、最上に引き止められる
▪「それに、提督に会いに行くなら皆揃ってからの方がいいでしょ？」
▪…と最上が続ける。
▪確かにそうだ……山城と扶桑も提督に会いたがっているに違いない
▪僕だけ抜け駆けは良くない……よね。
▪二人の入渠は明朝頃には終わるみたいだ
▪明日、提督に会えるのが楽しみだな
▪提督に直接お礼を言わないと…

◇参日目

・マルキュウマルマル
・司令室にて

・提督は泣きながら僕らを迎えてくれた
・提督は本当に優しいんだね
・でも提督の涙を見ると
・僕も悲しくなっちゃうよ

・涙ぐみながら提督は
・僕のことを抱きしめて、頭を撫でながら
・優しい言葉を掛けてくれた
・久しぶりに感じる、
・提督の温もり……
・提督の匂い……
・提督の感触……
・できることなら、ずっとこうしていたいな…
・山城、扶桑、最上、山雲、朝雲、満潮……
・そして提督
・
・みんな僕のかけがえのない家族だ

・でも、僕が病室で寝ている間、お見舞いに来てくれなくて
・少し…寂しかったんだよ
・提督は忙しいから、仕方がない……よね

◇四日目

▪イチハチマルマル
▪食堂へ向かう道中
▪気がつけばに司令室へ立ち寄っていた
▪提督が「どうした、時雨？」と頭を撫でてくれる
▪えへへ……
▪「提督も、無理しちゃダメだよ…」
▪ボクはそう言って、
▪不機嫌そうにこちらを睨む大淀を尻目に、司令室を後にした。
▪やっぱり提督の顔を見ると安心する
▪ずっとずっと……そばにいたい…
▪何となく提督が元気が無い気がしたんだけど…
▪気のせいかな

◇伍日目

▪今日、港に見慣れない黒色の船が止まっていた
▪大本営の重鎮と呼ばれる人物も何人か見かけた
▪
▪一体何の用だろう
▪そういえば僕が病室にいたときも
▪窓からあの黒い船が見えていた気がする…
▪もしかして提督がお見舞いに来てくれなかったのって…
▪いや、来れなかったのって……
▪……
▪気のせい……だよね…
▪おもむろに卓上のみかんに手を伸ばし、
▪一房（ひとふさ）口にほうばる
▪治りかけの口内の傷口に染みて少し痛かった
▪そうだ今度、提督にも持って行ってあげよう
▪提督もみかん、好きかな…

◇六日目

▪フタサンサンマル
▪一日中提督を探し回って、やっと会えた
▪提督……どこに行ってたの……？
▪詳しく事情を聞こうとした
▪……けど、提督はなんだか疲れている様子だったのでやめておいた
▪後で最上から聞いたけど
▪港に止まってる黒い船の中に
▪今日ずっと閉じ込められていたってさ…
▪提督……あいつらに何かされたの？

▪ねぇ、提督……

◇七日目

▪マルハチマルマル
▪司令室の前で
▪満潮をはじめとした駆逐艦たちが提督に詰め寄っていた
▪どうやら大本営の連中との諍（いさか）いがあったことを聞きつけたらしい
▪「提督……なんだか元気がないように見えますよ～」
▪「ちょっ…提督！山ちゃんのこと無視しないで、ちゃんと説明してくれる!?」
▪「どうして私たちのこと頼ってくれないのよ…！」

▪そうだよ……提督
▪あいつら……
▪提督のことを無理矢理、狭い部屋に閉じ込めて
▪大人数で提督に酷いこと言ってたんだってね……
▪許さない……

◇八日目

▪雨。
▪提督は…雨、好きなのかな
▪僕は
▪ちょっと苦手だな
▪止まない雨は…ない……よね、提督

◇九日目

▪マルゴーマルマル
▪朝起きたら、例の黒い船からぞろぞろと人が出てきた。
▪またあいつらだ。
▪提督が無事か確認しないと…
▪司令室へ向かおうとしたら、扶桑に呼び止められた
▪彼女は「大丈夫よ」と微笑むと、そのまま司令室へ向かって行った
▪提督……僕、心配だよ

◇拾日目

▪フタマルマルマル
▪秘書官に今日の演習の報告を終えて、日記に筆を走らせている
▪例の船は数日前からずっと停泊したままだ
▪あの船が来てから、提督は忙しいみたいで全然会えていない
▪提督がまたあいつらに攻撃されてるんじゃないか心配だ
▪でも大丈夫だよ提督…

▪どんなことがあっても
▪どんな相手だとしても
▪僕が絶対、提督を守るからね

◇拾壱日目

▪「提督が辞職なさるそうです」
▪秘書官の大淀がそう言った。

▪意味が分からなかった。
▪わけがわからない。
▪理解したくもない。

▪考えたくない

◇――

▪今日も提督と会えない
▪お願い
▪僕を一人ぼっちにしないで

◇――

▪マルヨンサンマル
▪司令室から提督が出てきた
▪ごめんね、こんな朝早くから
▪え？　ちゃんと寝たか…って…？

▪……大丈夫だよ
▪提督のためなら　これくらいへっちゃらさ
▪ねぇ、提督……どうして急にいなくなっちゃうの？

▪「いつかまた会える……」
▪だから大丈夫……？
▪…
▪……
▪提督ってさ
▪僕らに嘘をつくとき
▪目を見て話してくれないよね

▪なんで
▪どうして？
▪教えてよ

…
……
そっか……
きっと僕が悪いんだよね……
僕が提督をちゃんと守れなかったから……
ごめんね……提督……
僕のせいだ

◇――

眠れない…
だって、明日で提督がいなくなっちゃう…
寒い……寒いよ…提督……
提督、言ってくれたよね
いつでも一緒にいても……
〝いつまでもそばにいていい〟……ってさ

◇――

夜、提督に会った。
「今日でもう…お別れだね」
ねぇ、提督…
行かないでよ…
「朝早くなんだね……そっか……ううん、なんでもないよ」
もう会えないなんて嫌だよ……
「僕がお見送りしようか？　あ、ごめん…余計だったかな…」
一人は嫌いなんだ…
「ねぇ提督、みかん一緒に食べよ。あ……お茶、淹れるね」

▪僕を置いていかないで……

◇――

▪マルゴーマルマル
▪部屋の外から
▪あいつらがドアを叩いて叫んでいる
▪「貴様は完全に包囲されている！」
▪「人質を開放しろ！」
▪「要求はなんだッ！」
▪…
▪……
▪何を言ってるんだ
▪提督を僕から奪おうとしているのは、キミたちだよね？
▪提督は僕の膝の上で眠っている
▪睡眠薬が効いてるみたいだね…
▪たまにはゆっくり休まないと
▪だってほら、提督……一人で無理しすぎるからさ……
▪……提督の寝顔、可愛いなぁ…
▪大丈夫、僕がいるから……
▪ずっとずっと…
▪僕が提督を守ってあげるからね

◇――

▪マルゴーマルマル

▪部屋の前から鈍い音がしたと同時に
▪あいつらの気配が消えるのを感じた
▪気がつくと、目の前に扶桑たちがいた
▪「さぁ、私たちで提督をお守りしましょう」
▪そっか……キミたちも
▪僕と同じ気持ちなんだね……

◇――

▪窓から黒い船がたくさん見える
▪大丈夫だよ、提督
▪僕らがついているから

▪さて、今日もうるさい小バエを落とさないと
▪提督、またいっぱい褒めてくれるかな

▪ずーっとずっと
▪いつまでも……

▪一緒だから……

▪ね、提督

アニメ２期、まさかの延期ですね。
待ちきれなくて、こんなＳＳまで作ってしまいました…
次回は「最上」。
世界観は一緒なので、また見てくださると幸いです。

最上「提督が……辞める？」

最上「大淀、冗談……だよね」
大淀「残念ですが……本当です」
最上「…このこと知ってるの、ボクと大淀だけ？」
大淀「はい、混乱を避けるために……と提督が」
最上「……」
大淀「最上……さん？」
最上「くっ…！」（ダッ
大淀「……」

そんなの……嘘に決まってるよね……
今すぐ提督に確認しないと……
最上「はぁ……っ！はぁ……！」（タッタッタッ

提督が辞めちゃうなんて
そんなの
ボクは認めない

認めたくない……！

◇――

フタマルマルマル

最上「提督！　辞めるってどういうことさ！」
最上「ボクの傷？　こんなのツバ付けとけば治るよ！」
最上「それよりどうして!?　ねぇ、教えてよ……」

提督「……」

提督は黙ったまま答えようとしてくれない。

”提督がいなくなっちゃったら
ボクは生きている意味がなくなっちゃうよ……”

本音を必死に押し殺そうとした
でも

最上「提督が辞めちゃうならさ……」
最上「あのままレイテで沈んでおくんだった……」
気付いたら声に出てしまっていた。

最上「ぁ……提督……今のは……っ！」

提督が勢いよく駆け寄ってくる。
あぁ……ごめんね提督
流石に……
怒られちゃうかな

ぎゅっ…
提督はボクの身体を力強く抱きしめてくれた。
最上「っ……痛いよ……提督」
冗談だよ、ボクが本当にそんなこと思うわけないじゃないか
だって、提督さみしがりやの甘えん坊さんだもん。
最上「ごめんね、提督。もうあんなこと言わないからさ……」

ボクがいなくなったら、提督が悲しむもんね
それだけはしたくない

でも、もし提督を悲しませるやつがいたとしたら……
最上「……」

ふふっ……これも冗談だよ

◇

フタサンサンマル
今日、提督を観察して分かったことがる。

提督が早朝から外へ出かけているということ。
これは提督の寝室を窓の隙間から見て確認したから間違いない。

(提督の寝顔が見れると思ったのにな……残念)
え？　3階にある寝室の窓をどうやって覗いたかって？
……それは秘密♪
肝心なのは
提督がどこに行ったのか、だもんね

提督を探すために、鎮守府を歩いていたら
港の隅に黒色の船が停泊していた。
最上「あれは……」
建物の影に隠れていて気付かなかった。
船内を確認したかったけど、
見張りが何人もいてそれができない。

最上「それなら……」

警備員Ａ「……」
警備員Ｂ「……っ！　おい貴様、止まれ」
最上「わわっ…ごめんなさい」
警備員Ｂ「何用だ？」
最上「提督に電文があって…」
警備員Ｂ「後にしろ」
最上「急な用事なんだ、通してくれるかな」
警備員Ａ「ダメだ、許可のない者は接見禁止だ」
最上「接見禁止……？　どういうことさ！」
最上「提督のこと閉じ込めて、辞めさせるつもりなんだろ!?」

（ギロッ

警備員Ａ「……っ！」
警備員Ｂ「貴様には関係ない！」
警備員Ｂ「今すぐ立ち去らないのならば……分かるな？」
最上「……」
警備員Ａ「おい、何をやっている？　早く行け！　この…ッ！」
最上「いったたた…、引っ張らないでよ…！」
最上（提督以外の人に触られちゃった……早く消毒しないと…）

ジジ……

警備員Ａ『フン、口の聴き方も知らないのか、芋娘が…』
警備員Ａ『全くこれだから支部の連中は……』

警備員B『おい、さっきのはまずかったぞ』
警備員A『何がだ？　俺は仕事をしたまでだ』
警備員B『あいつらは”バケモノ”なんだぞ。下手に逆上させると何をされるか…』

最上「……」
うん、バッチリ聞こえてるよ
さっき腕掴まれたときに盗聴器仕掛けたからね。

警備員A『ところでさっきの芋娘が言ってた話は本当なのか？』

警備員B『いや、厳密に言うと少し違う』
警備員A『どういうことだ…？』
警備員B『あぁ、知らねぇのか。』
警備員B『どうやら、本部から招集が掛かったらしい』
警備員A『本部って……まさか……!?』
警備員B『あぁ、”大本営”……”元帥様”　直々のお誘いだと』

警備員A『冗談だろ……』
警備員B『いや、本当だ。上官から聞いたから間違いない』
警備員B『だが提督は元帥の意見具申を断るつもりらしい』
警備員A『大本営に行けば待遇も上がるだろうにどうして…』

警備員A『それに断ったら辞職を強いられるに間違いないだろ…』

警備員A『まぁ、辞めても退職金が弾むだろうから安泰に過ごせそうだがな』
警備員B『辞めるだけで済めばいいがな……』
警備員A『どういうことだ…？』
警備員B『さぁな……』

警備員Ｂ『だが、これだけは言える』
警備員Ｂ『元帥殿の意向を無視する代償は大きい』
警備員Ａ『ゴク……』
警備員Ｂ『俺たちも気を付けなきゃな…ハハハ』
警備員Ａ『笑えねぇよ……』

最上「……っ！」
最上「そ、そんな……提督……っ」

◇

無線チャンネルを提督の執務室と端末に合わせて…
”　ガチャッ　”
提督の寝室のドアが開く音がする。
提督、そろそろ寝るんだね
今日も夜遅くまでお疲れ様
え？　どうして分かるかって？
提督の執務室にも”お守り”を設置してるからに決まってるじゃないか
これなら離れてても提督を見守れるし
提督と一緒に眠れて一石二鳥だよね

”くそ……”
最上「提督……？」
もしかして、提督……泣いてるの？
無線の感度を最大まで上げる

最上「……」

”みんな……本当にすまない……”

提督が消え入るような声でそう言っていた

最上「……っ」

黒い感情が湧いてくる…

ダメだ……

この気持ちを抑えられる自信がない。

提督が話してくれないのは、ボクたちのためを思って……

提督……一人で抱えて苦しいよね

大丈夫……

最上「ボクがなんとかするから、待っててね提督」

◇

マルゴーマルマル

今日も朝一で提督に会いに行く。

最上「提督、昨日は良く眠れた？」

最上「なんだか最近疲れてるみたいだけど…悩み事とかない？」

提督に少しカマをかけてみる。
提督「最上は本当に優しいな……」
最上「えっへへ…♪　提督、くすぐったいよ」

提督「でも、最上には何も教えられない……」
提督「それに、もうすぐ私はここから去る」
提督「私のことなんか、忘れてしまっても大丈夫だ」

最上「……」

提督「最上……」
提督「本当に、ごめんな……」
最上「……」

”　五月雨は　集めて早し　最上川　”
提督も聞いたこと、あるでしょ？
あのね、はじめは「集めて”涼し”」だったんだけど
実際に最上川の流れの早さを体験して、後で詠み変えたんだってさ

ねぇ提督

ボクってさ、怒ると意外と怖いんだよ？

◇――

提督の服に”お守り”を付けておいた。
提督のプライバシーが全部筒抜けになるから、こんなことはしたくなかったけど……
でも、提督を守るためだから、許してね。

無線のチャンネルを合わせる

ジジ……

???『組織の意向に逆らうつもりか!?』(バシッ!
提督『ぐっ……!』

上官のものと思われる怒号の後に
提督のうめき声が聞こえた。
まさか……

提督『私は……あの子たちを置いて…この場を離れることはできない!』
提督『あの子たちは今も戦場で戦っているんだ…!』
提督『それを高みの見物なんて……私にはできない!』
上官『貴様、大本営の職務を愚弄する気か!?』

やっぱり……
提督のこと、そうやって脅して……悲しませてたんだ…

最上「提督、待っててね」
最上「今すぐ助けに行くから……!」

コンコンコン
上官「なんだ……執務中に……入れ！」
ガチャッ
元帥「……」
上官「……っ！元帥殿！」
元帥「キミ、下がりなさい」
上官「……はっ！」

元帥「提督くん、久しぶりだね」
提督「お久しぶりです……元帥殿」
元帥「今日はよく晴れている」
元帥「あれは……瑞雲かな？」
元帥「私も若い頃はあれで飛んでいたよ」
提督「……」
元帥「さて、単調直入に聞こう」
元帥「部下を捨ててこちらに来なさい」
提督「……できません」
元帥「……」
元帥「はぁ……それは私が聞きたい答えではないな」
元帥「提督、キミもここは長いんだろう？」
提督「……」
元帥「これまでの戦果を考えても、昇格は妥当だと思うが？」
提督「自分は……人の上に立つ器ではありません」
元帥「謙遜しているのか？」
元帥「キミは優秀な人材なのだよ、軍としても失うのは惜しい」

元帥「それに、事の大きさが分からぬわけでもあるまい」
提督「……」
上官「元帥殿の意向に逆らうつもりか!?」
元帥「貴様は黙っていろッ!!」

上官「……ッ！」（ビクッ

提督「……」

元帥「なぜこだわる？」

提督「……私には、大切な部下たちがいますから」

提督「家族のように大切なみんなが……」

上官（……）

元帥「なるほど…？」

元帥「キミが〝あれら〟を大切に思っているのは承知している」

元帥「だが、その思い入れこそが諸刃の剣になりかねんのだ」

元帥「キミがここを去ると同時に、〝あれら〟はすべて解体」

元帥「これに変わりはない」

元帥「分かっていただけるかね？」

提督「……」

元帥「気にすることはない、〝あれら〟はまた〝作れば〟良い」

元帥「なぁに、〝あれら〟は生娘の皮をかぶった〝兵器〟だ」

上官（……）

元帥「そんなこだわりより、キミの自身の出世のほうが大切ではないのか？」

元帥「そうだろう？」

元帥「そのために、今まで共に苦難を乗り越えてきたんじゃないか…」

元帥「思い出してみろ、我々が戦闘員時代のことを…」

元帥「私はキミに空の飛び方を教えた…」

元帥「あの頃のようにまた楽しくやろうじゃないか…！」

上官（泣き落としか…？　食えねぇジジイだぜ……）

提督「……」
提督「元帥殿……」

提督「なんと言われても……私は……
元帥「これは命令だ…ッ!!」

提督「……」
提督「お言葉ですが……」
上官（それ以上は言うな……）
提督「あなたたちが私の大切な仲間を……」
提督「ただの”兵器”として見ている限り……」
上官（おい…！）
提督「私はあなた方の言いなりにはなりません…！」

元帥「……」
元帥「今一度聞こう」
元帥「私が聞きたいのは、」
元帥「「生きる」か「死ぬか」だ」
提督「……」

提督「自分は……」
提督「あの子たちを解体することはできません。」
提督「あの子たちを導くのが私の使命であり…」
提督「この命に変えても、あの子たちを守れるのなら、それが本望です」
元帥「……」
元帥「そうか、それがキミの答えなのだな」
ジャキッ

提督「……」
元帥「最期に言い残すことは？」
提督「あの子たちのことを……頼みます」

最上「提督……！」ガチャッ!!!

提督「……最上ッ!?」
元帥「なんだ貴様は、止まれッ!!」

上官「よせ!!」
バァンッ!!!

提督「最上……」

最上「て……いと…く……大丈……夫……？」
最上「提督のこと……ちゃんと……」
最上「……守って……あげられた……かな……」

最上「……」（バタッ

提督「も……最上……？」
提督「最上……っ!!!」

だめだ、力が入らないや…

提督「しっかりしろ……！最上…!!」
提督の声だ……

どうしたの…提督……
そんなに悲しそうな顔しないでよ……

提督のことを悲しませてるやつは誰……

ボク……？　ボクが……提督を悲しませてるの……？

ごめんね……提督のこと、まだ守らないといけないのに……
提督に……、ボクの本当の気持ちを……
伝えないといけないのに……

ていと……く

◆

提督「最上……」
提督「最上、朝だぞ」
最上「あ、あれ……ここは……」

提督「私の寝室だ」
最上「え……て、て、て、提督の……寝室!?」
提督「あぁ……2，3日、寝っぱなしだったんだ」
提督「……それより最上……」
最上「あ……怪我？」
最上「も～提督ってば心配性だなぁ～もう♪」
最上「ボクなら……ほら！　全然へっちゃらさ！」
最上「あっ！もう消灯時間だよ！　提督も一緒に寝よ！」

最上「えっへへ……提督のふとん、温かい……」
最上「ボクさ、こうして提督の執務室のおふとんで寝るのが夢だったんだぁ…！」
最上「えっへへ…提督の匂いがする…♪」
最上「……なんだか…ボク、眠くなってきちゃったみたいだ…」
最上「提督ともっとお話したいのに……」
最上「提督……」
最上「ボク、少し……眠るね……」
最上「えっへへ…、提督……」
最上「大好き……」

◇

提督「大淀、最上の容態は……？」
大淀「いえ……まだ……」
提督「そうか、今日も目覚めないか……」
提督「私が……私に力が無かったせいだ……」
大淀「提督…っ！ご自身を責めないでください！」
提督「……ああ、分かっている。最上も望んでいないもんな」
提督「いかんな、これでは最上が起きたときに合わせる顔がない」
大淀「提督……」

提督「最上……私のことを……」
提督「みんなのことを守ってくれてありがとう」
提督「今度は私が最上を守ってやるからな……」

大淀「……」
大淀「……っ！」
大淀（最上さん……今、微笑んだような……）

提督「さぁ、今日も仕事だ。まだまだ仕事が山積みだからな」
提督「大淀、今日も遅くなりそうだが、頼むぞ」
大淀「はい、提督！」

見てくださりありがとうございました。
次回は「山城・扶桑」を予定しています。

扶桑・山城「私たちを抱いてください……！」

扶桑「さぁ、提督……遠慮なさらず…」（ヌギヌギ

提督「え」

扶桑「その……私、こういうの初めてなので……優しくしていただけると……」

提督「……」

山城「は……恥ずかしいですから……するなら早くしてください」

提督「……」

提督（ど、どうしてこうなった……！）

――

――

◇数日前

大淀「本部から入電」

大淀「提督、大本営から招集が掛かりました」

大淀「本部にて大規模な作戦会議が行われる模様です」

提督「え、またか？」

提督「嫌なんだよな、上官怖いし」

大淀「でも出席なさらないと……」

提督「あぁ、色々とマズイ」

提督「まず、支援物資が届かなくなる」

大淀「今後の配給の日程や航路の打ち合わせもありますからね……」
提督「そして何より組織から孤立する……」
大淀「横の繋がりは大切ですからね……」
提督「仕方がない、重い腰を上げるとするかね」
提督「さて……となると早速、護送部隊の結成をしなきゃだな」
提督「私一人で海へ出たら、深海棲艦の餌食になりかねん」
大淀「ですね」
提督「……で、他に何か聞いているか？」
提督「わざわざ招集を掛けるってことはまさか…」
大淀「それが……」

ダッダッダッダッダッ！

山城「提督っ!!」（バタンッ！
提督「うぉ…！」
山城「どうして私を置いて姉さまだけ出撃させたんですか!?」
山城「私がお姉さまをお守りしないといけないのに！」
提督「や、山城……まぁ落ち着け」
山城「落ち着いてられませんっ!!」
山城「いいですか？　そもそも私たちは姉妹なんですから同じ艦隊に編成した方が……！」
提督（まずい……また暴走し始めた…）
提督（まぁ、こうなることは編成したときから分かっていたが……）
提督（とにかく、女性が怒っている時は何も言い訳せず、まず男から謝るべし！）
提督（足柄からの受け売りだがな！）

提督「す、すまない山城！」
提督「確かに姉妹のお前たちを艦隊に入れたほうが連携が取れるよな…！」
提督「ほ、ほら！　間宮の食券二人分あげるからさ！」
提督（よし、これで山城の機嫌も元に……）

山城「提督……」
山城「そうやって適当に平謝りしておけばいいって思ってるんでしょ…」
提督「……っ！」（ギクッ
山城「艦隊のお荷物は黙って留守番してろって言いたいんでしょ!?」
提督「そ、それは被害妄想だって！」
山城「いいえ、そんなことありません！」
山城「だいたい、提督は私たちの上官のくせに腰が低すぎます！」
提督「うぅ……」
山城「私、聞きましたよ？」
山城「どこぞの一航戦がカレーにボーキサイトを混入してても怒らない！」
山城「全艦キラ付け遠征して大成功しなかったのにも関わらず怒らない！」
山城「そんなだから、駆逐艦の子供たちにも舐められるんですっ！」
提督（返す言葉もない……！）
提督（というか、カレーにボーキサイトってどういうことだ!?　初耳だぞ！）

提督「すまん……」

山城「あっ……そ、そんなに落ち込まなくても…！」

山城（す、少し、言い過ぎたかしら……）
山城「……」
山城「私、昼食に行ってきますから…！」
山城「では、失礼します！」バタンッ！

提督「……」ポツーン

大淀「提督、私たちも休憩にします？」
提督「お、おう……」

◇

ガヤガヤ……
山城（……）
山城（ったく……提督ったら本当に頼りにならないんだから…！）

山城（……でも、さっきのは少し責め過ぎたかも……）
山城（……）
山城（いやいや！　あれくらい普通よ！）
山城（それに、あんなことで提督が落ち込むわけがないしっ）
山城（はぁ……なんだか胸がムカムカする……）
ガヤガヤ…キャッキャ
山城（それにしても、周りの連中は静かに食事できないのか

しら…！）

山城（姉さまは入渠中だからお話できないし……）

山城「はぁ……」

山城（不幸だわ……）

「ねぇ見て、山城さん今日も一人なのかな…？」

「あれ、扶桑さんは？」

「またドッグ入りですって…」

「まあ低速艦は被弾が多いからね～」

「戦列にも入れにくいしね…」

山城「……ッ！」（ガタッ

山城「なんだと!!こぬぉおおおおおお!?」

「「う、うわぁぁぁあ！」」

「「ちょ、山城!!暴れないで!!」」

――

――

ガラガラガラ……パタン

扶桑（……あら？）

扶桑（こんな時間に入渠だなんて…誰かしら？）

山城「姉さま、隣失礼しますね」（チャプ…

扶桑「あら、山城♪」

山城「……」（ムスッ

扶桑「……？」

扶桑（山城……今日は出撃無いはずだけど……）

扶桑（どうして怪我してるのかしら……）
扶桑「……」
扶桑（理由を聞くのは野暮ね）
山城「……」（ツーン）
扶桑（……あらあら）

◇――

扶桑「ふぅ……いいお湯だったわね、山城♪」
扶桑「さ、着替えたら提督の執務室へ行かないと…」
山城「……」ブツブツ
山城「何が不幸艦よ……」ブツブツ
扶桑「……山城？」
山城「不幸だわ……」ブツブツ
扶桑「山城っ！」
山城「……ッ！　お、お姉さま、ど、どうされました？」アセアセ
扶桑「……」
扶桑「山城、下着で髪を結んでるわよ？」
山城「あっあれ、いつの間に…!?　やだ、私ったら……ふふふ…」
扶桑「……」
扶桑（思った以上に深刻みたい…）
扶桑（このままでは任務にも支障が出かねないかもしれないわね）

◇――

山城「演習……？」

大淀「はい、山城さんには明日の演習に参加していただきます」

山城「またどうして急に……」

大淀「提督の意向で、今度の護送作戦に出撃していただくことになりました」

山城（護送……？　一体何を……）

山城「了解よ……で、姉さまは？」

大淀「はい？」

山城「だから、その作戦に扶桑姉さまは同行するの？」

大淀「いえ、扶桑さんは休暇の予定です」

山城「ったく、なんで姉さまと一緒の艦隊にしてくれないのよ……提督っ！」

大淀「今晩、艦隊の顔合わせがあるので出席お願いしますね」

山城「はいはい……」

大淀「それと、山城さん！」

山城「なによ」（ムスッ

大淀「くれぐれもトラブルは起こさないでくださいね」

山城「はぁ…？　トラブルなんて起こしたこと……」

大淀「駆逐艦のみなさんが、〃山城さん怖い～〃……って言ってましたよ？」

山城「……」

山城「不幸だわ……」スタスタ…

大淀「あっ、山城さんに作戦の内容を伝えるの忘れてました……」
大淀（山城さん、なんだか不機嫌そうだから呼び止め辛い…）
大淀「そうだ、扶桑さんに伝言お願いしましょう」

◇――

ガチャッ
山城「……」
山城「はぁ……なんて憂鬱なのかしら……」
山城「今日の演習、一発も当てられなかった……」
山城「姉さまがいてくれれば、少しはやる気が出るんだけど」
山城「……」
山城「は……っ！姉さまはどこへ……!?」
山城「……って、さっき提督の執務室の前で別れたんだったわね」

山城「はぁ……」
山城「そういえば……」
山城「提督と会う機会が最近減ってきてない？」
山城「この頃、私に出撃が掛かってなくて、ゆっくり顔を合わせてないかも…」
山城「最初の頃は毎日話してた気がするのに……」
山城「そういえば、あの頃は戦艦も私たち姉妹だけだったかしら」
山城「初めての大規模作戦に参加した時は、執務室で寝泊まりしてたのよね」
山城「なんだか少し懐かしいわ……」
山城「……」
山城「……って、どうして提督とのことなんか考えてんのよ

!?」

山城「私には姉さまがいれば十分…っ」

山城「でも……提督」

山城「どうして出撃させてくれないのかしら…」

”駆逐艦のみなさんが怖がっていましたよ!”

山城「思い当たる節があるとすれば……」

山城「性格?」

山城「提督にも強く当たっちゃうことあるし……」

山城「な、そ、それは当然よ!」

山城「そもそも、姉さまと一緒の艦隊に編成しない提督が悪いのよ!」

山城「……」

山城「……はぁ」

”時代遅れの欠陥戦艦なんだから、当然でしょ…?”

山城「くっ……!」(ギュウウ

”私たち、今度の出撃はポンコツ姉妹と同じ部隊なんだって

”

”嘘でしょ!? ほんっと最悪っ…!”

山城「ぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

山城「うるさいうるさいッ……!!!」

扶桑「……」
扶桑（あぁ……どうしましょう……）
扶桑（今度の護送作戦のこと伝えるために、山城の寝室に来てみたけど……）
扶桑「……」
扶桑（今は……そっとしておいたほうが良さそうね……）

扶桑（大丈夫よ、山城。私たちにもできることはある）
扶桑（……そう）
扶桑（私たちが提督をお守りするのよ……）

◇

ガヤガヤ…

「今日は二人揃ってるみたいね」
「しっ！　声が大きいって…！」

扶桑「山城…？　さっきから箸が進んでいないようだけれど…」

山城「あ、いえ、さっき間食してしまって…」
山城「姉さまは気にせず先に食べてください」

扶桑「……」

扶桑「えい……っ」（モミモミ……♡

山城「ふゃあっ……♡」

山城「……って、ね、ね、ね、姉さまッ！」／／／

扶桑「あら、山城ったら……顔が真っ赤よ？」

山城「ちょ、ちょっと…からかわないでくださいっ！」

扶桑「うふふ…えいえい♡」（モミモミ

山城「姉さまったら……だ、大胆っ！♡」

「ちょ、ちょっと何か始まった……／／／」

「あの姉妹、真っ昼間からなに発情してんのよ!?／／／」

「……／／／／／／」ドキドキドキ

扶桑「あらあら……山城ったら可愛い♡　うふふ…♪」（ムニムニ…♡

山城「公衆の面前なのに……姉さま、そんなっダメですっ！♡」

山城（嘘です……もっと激しく～っ♡）

扶桑「はい、おしまい♪」

山城「あっ」

山城「ブツブツブツ…（姉さまのイジワル…）」

扶桑「うっふふ…♪」

扶桑「山城……元気、出たかしら？」
扶桑「なんだか最近、落ち込んでるように見えたから……ね？」

山城「姉さま……」
山城「……」
扶桑「ねぇ山城？　何か悩んでることとかない？」
山城「悩んでる……こと？」
扶桑「ええ、よかったら私に話して？」
扶桑「ほら、人に話したら気が楽になるって言うでしょ？」
山城「……」
山城「わかり……ました」
扶桑「……♪」ニコッ

山城「……悩み……というか、その……」
山城「……他のやつらに……ぼっちだとか、欠陥だとか……バカにされて……」
山城「それに……姉さまのことも、蔑まれた気がして……」
山城「その……うぅ……」
扶桑「……」
扶桑「山城……こっち来て」（ギュッ
山城「ね、姉さまっ…♡」
扶桑「ありがとう、山城」
山城「……姉さま？」
扶桑「山城、貴方の気持ち、教えてくれて、私嬉しいわ♪」
扶桑「私たちはたった二人だけの姉妹」
扶桑「辛いことも楽しいことも、共に分かち合うの」
山城「姉さま……っ」
扶桑「だからね、山城…」
扶桑「もし、落ち込んでしまったら辛くなったら、私に言いなさい」
扶桑「もう、一人で我慢しなくていいからね」

山城「あぁ……」パアァ
山城「はい……っ姉さま……！」

「きょ、今日のあの二人、凄かったね……／／／」
「う、うん……／／／」

◇

提督「山城すまんな、急に呼び出してしまって」
山城「…いいから、早く要件を言って頂戴」
山城「こっちはお姉さまとの大切な時間を削ってるんですからねっ」
提督「すまんすまん」
山城「……」ムスッ

提督「実はな、明後日の護衛任務なんだが」
提督「扶桑にも艦隊に入ってもらうことになった」
山城「提督……！」（パアァ…
山城「ようやく分かってくれたんですね、提督♪」（ダキッ
提督「うぉっ」
山城「扶桑姉さまと私のコンビなら、どんな敵からでも守ります！」
山城「だって、姉さまを守れるのは私しかいませんもの…！」
提督「任務の趣旨変わってないか…!?」
山城「では、提督」
山城「明後日の護衛任務、楽しみにしてます♪」
ガチャッ、バタン……

提督「楽しみ……か……」

◇

大淀「山城さん、お疲れ様です」
山城「あ、あぁ大淀……」
山城「その……、今日も遅くまで……お、お疲れ様……」
山城（なんか姉さま以外にこういうこと言うの恥ずかしいわ……）
大淀（デレてる山城さん可愛い……）
山城「…で、何よ。何か用があって声かけたんでしょ？」
大淀「あっそうでした。」コホン
大淀「明後日の護送任務についてです」
大淀「提督を大本営まで護衛する艦隊編成についてなのですが……」
山城「は……？」
大淀「……？」
山城「大淀、どういうこと？」
山城「提督が大本営へって……」

山城「ちょっと、ちゃんと説明しなさいよ！」（グイッ

大淀「い、今説明しますから……」

大淀「って、山城……さん？　もしかして……」

大淀「扶桑さんから聞いていなかったのですか？」

山城「大淀……あんた、その冗談笑えないわよ」

大淀「いえ、冗談なんかじゃありません！」

山城「うそ……」

大淀「……」

大淀「提督は明後日から大本営に招集命令が掛かりました」

山城「どうして招集!?　提督、何かしたの!?」

大淀「いえ……そういうわけではありませんが……」

大淀「来季からの物資の補給航路など、機密の会議を行うため……」

大淀「それと……」

山城「それと……？」

大淀「敵泊地最前線での作戦指揮を任命されるとのことです……」

山城「……」

大淀「扶桑さんに言伝を頼んでおいたはずですが…」

山城「……」

山城「それってつまり……」

山城「提督一人だけで、危険な最前線へ行かなきゃいけない……」

山城「提督の命が危険に晒されるということよね!?」

大淀「はい……」
山城「……っ！」ダッ！
大淀「あっ、扶桑さん！」

山城（何も知らなかった私は……）
”護衛任務、楽しみにしてます♪”
山城（提督の前で、軽はずみなことを言ってしまった……）
山城（提督は戦場に行かなければならなくて不安だというのに……）

山城「どうして、なんで、どうして…！」タッタッタッタッ
山城「何？　何、この気持ち!?」
山城「ハッ！　提督がいなくなって清々するはずでしょ……！」

山城「何を私は動揺して……」

山城「……っ！」
山城「姉さま……」
扶桑「山城…？」
扶桑「どうしたの？　そんなに急いで…」
山城「……」
山城「失礼します……ッ！」ダッ
扶桑「あっ山城！」
扶桑「……」

姉さま……
提督が辞めること、知っていたんですよね……
どうして、私に教えてくれなかったのですか……
あの時、誓い合いましたよね？
苦しいことも楽しいことも共に分かち合おうって…！
どうして嘘つくんですか……
どうして私にだけ……
なんで……どうして……!?
姉さま……ッ！

山城「提督も提督よ……！」タッタッタッタッ
山城「私に黙って去ろうだなんて……！」
山城「……」

山城「あぁ……」
山城「私ったらなんて愚かなのかしら」
山城「今更自分の気持に気付くなんて…」
山城「私ったら、何を期待していたのかしら…」

山城「提督……いつも酷いこと言って、ごめんなさい……」
山城「今思えば、先に謝ってくれていたのは、いつも貴方だったわね…」
山城「私は強情で頑固だから……」

山城「フフっ」

山城「フフフ……」
山城「あのね山城……」
山城「今更反省したって遅いの…」
山城「提督はあんたのこと、何とも思っていないのよ……っ」
山城「提督は私にとってたった一人の上官で……」
山城「私は大勢の部下の中の一人」
山城「私はただの兵器」
山城「それ以上でもそれ以下でもない……」

山城「フフフフフ……アハハハ……」

―――

雪風「……」
雪風「……！」
雪風（あっ、山城さんだ）
雪風「お疲れ様です！」ケイレイ！

山城「……」
山城「……」ブツブツ…
山城「……」ブツブツ…ブツブツ…

山城「姉さま姉さま姉さま姉さま…」
山城「どうしてどうしてどうしてどうして…」
山城「ていとく…ていとく……」
山城「提督…離さない、絶対離さない離さない離さない…」
山城「……」ブツブツ…
雪風「あわわ……」ビクビク

雪風「……ということがありました！」
扶桑「なるほど……」
扶桑（やっぱり一人で抱え込んでしまっているのね…）
扶桑「雪風ちゃん、助かったわ、ありがとう♪」
雪風「どういたしまして！」（ケイレイッ
扶桑「……」
扶桑「もうこれしかないわね…」

扶桑「山城……ねぇ山城、聞いてる？」
山城「……ごめんなさい姉さま、今は一人にして欲しいです」
扶桑「あのね、山城に話したいことがあって……」
山城「話したいこと……今更ですか？」

扶桑「山城…？」
山城「姉さま、どういて私に黙っていたんですか!?」
山城「提督が鎮守府を去ってしまうこと！」
扶桑「そうね……」
扶桑「……ごめんなさい、山城」
扶桑「隠そうと思ってたわけじゃないけど、きちんと話すべきだったわ…」
山城「……」
山城（姉さまも何か訳があって言わなかったに違いない…）
山城（おそらく、私のことを想って”あえて”伝えなかった…）
扶桑「ダメな姉でごめんなさい、山城……」
山城「姉さま……」

山城「いいえ姉さま、悪いのは私の方です」
山城「いつまでも子供みたいに、周りのみんなに迷惑ばかりかけて……」
山城「きっと提督が私に任務の内容を言ってくれなかったのも、」
山城「私が提督の好意に気付かず甘えてばかりいたから……」
扶桑「山城……」

山城「私、提督には危ない目にあって欲しくないと思っています」
山城「提督が私のことをどう思っていようとも……」
山城「提督が私のことをただの”兵器”だと思っていたとしても……」
山城「私は提督をお守りしたい……」
山城「普段、私たちが見ていないところで、」
山城「提督が見守ってくれているお返しをしたいんです」

山城「ですから姉さま、」
山城「提督を引き止める方法を教えてください……！」

扶桑「ふふ……山城♪」
扶桑「やっぱり貴方は私の妹だわ♪」
山城「姉さま…」
扶桑「だって、それを話したくて、山城を呼んだのよ？」

山城「姉さま！　教えてください！」

扶桑「それはね……」

扶桑「それはね山城、」

扶桑「提督と性交渉するのよ」

山城「え」
扶桑「早速、今晩お誘いしましょう♪」
山城「お、お、おおおおおお、お姉さま……!!!??」
山城「早まってはいけません!!」
山城「だ、だ、だ、ダメです！　お姉さま！」
扶桑「あら、どうして？」
山城「そ、そんな不純なコト……！　ましてや提督とだなんて……！」

山城（そ、それに心の準備が…!!）
扶桑「提督を引き止めるためなのよ？」
山城「ほ、本当にそれで……提督を引き止められるんですか

…!?」

扶桑「提督を肉欲に溺れさせて、鎮守府から離れられないようにします」

山城（姉さま、やっぱり大胆です！）

扶桑「あなたも、提督にいなくなって欲しくないはずよ？」

山城「……それは……そうですが……」

扶桑「次の作戦に参加すれば、提督は前線に身を置かれることになる」

扶桑「もしそうなれば、提督の命が危ない」

山城「はい……それは、その通りです」

扶桑「私ね、頑張ってる提督のお姿は大好きよ。でもね、」

扶桑「あまり無理はしてほしくないと想っているの」

山城「それは……私もそうです」

扶桑「普段は少し頼りないように見える提督だけど…」

扶桑「それは私たちを不安にさせないために、本音を隠しているからなの」

扶桑「提督とお近づきになれれば、本音が聞けると思わない？」

山城「それは……」

山城「確かにそうかもしれませんが……」

扶桑「山城」（ギュッ

山城「ね、姉さま!?／／／」

山城「と、突然抱きつかれると……ビックリします！／／／」

扶桑「次で最後かもしれないのよ？」

山城「え……」

山城「姉さま、どういうことですか…？」

扶桑「……」

扶桑「今度の海域の敵は強大よ、山城」
扶桑「貴方、まだ提督に伝えていないこと、あるんじゃないかしら？」
山城「……っ!!」
扶桑「うふふ……やっぱり私たちは姉妹ね♪」

◇

コンコン
提督「ん、入っていいぞ」
扶桑山城「「提督、失礼します」」（ガチャ
提督「おぉ、扶桑に山城じゃないか！　二人一緒なのは久しぶりだな」
山城「提督、私たちからお願いがあります」
提督「あ、あぁいいぞ？　何でも言ってみろ」

山城「私たちを」
扶桑「抱いてください」

提督「……ッ!?」（ブフォッ！
提督「き……急にどうしたんだ!?」
扶桑「提督、早速寝室へ行きましょう」（ギュウウウウウウウ
提督（な、なんて力だ…!!）
提督（扶桑ってそんなに力強かったのか!?）
山城「言っておきますが、拒否権はありませんから!!」
提督（な、なんて強引な……！）
提督「ま、待ってくれ！」

提督「流石にこれは逆レ○プみたいになってるって！」
扶桑「言われてみれば……」
山城「確かに……／／／」
カクカクシカジカ……
提督「……なるほど」
提督「確かに次の作戦は危険だし、私もそれなりに覚悟している」
山城「提督…！」
提督「私はこれでも男だからな」
提督「頼りないように見えるかもしれんが、軍人としての使命もある」
扶桑「……」
提督「逃げ出すわけにはいかんのだよ」
提督「たとえどれだけ大切な存在があったとしても…だ」
山城「提督……それなら、ここを辞めて私たちと一緒に暮らしましょう…！」
扶桑「提督と余生を過ごすには十分な貯蓄と退職金はあります」
山城「私たちを都合よく使っていただいても構いません……！」
提督「辞める……か」
提督「でも他のみんなもいるし、御上もすんなりと辞めさせてくれないだろうな……」
扶桑「なら、明後日の護送任務で、私たちが提督を拉致します」
提督「また物騒な……」
提督「だが他のみんなはどうする？」
提督「お前たちの練度を侮るわけじゃないが、」

提督「うちの艦はかなりの手練だぞ？　私が育てたからな」
山城「私が撹乱します。もちろん、他の子たちを傷つけたりはしません」
提督「……そうか、そこまで本気か」
扶桑山城「「はい……」」

提督「分かった……」
山城「提督…！」

提督「なら、預けるのは金や身体ではなく、」
提督「お前たちの命を私に預けてくれないか？」

扶桑「提督……？」
提督「実はな、今度の大規模作戦の編成に迷っていてな」
提督「お前たちの覚悟を聞いて決めたよ」

提督「今度の作戦、お前たちも参加してくれないか？」
山城「提督…！」
提督「嫌か？」
山城「いえ……提督のお力になれるのなら本望です、しかし…！」

提督「あ、さっきの高跳びする話は無しだ」
山城「そんな……」
提督「まず、私を拉致したらお前たちに罪が掛けられることになる」
提督「お前たちが不幸になるような真似は絶対したくない」
提督「あとお前たちを都合よく使うなんて論外だ」
扶桑「……」

提督「次の作戦は今までで一番危険だ」
提督「正直、私の墓場がそこになるかもしれん」

山城「そんなことさせません…！」
提督「だからこそだ、」
提督「もしそうなった時は、お前たちに看取ってもらいたい」
扶桑「提督……っ」
山城「そんなこと……私には……」
提督「扶桑、山城」
提督「お前たちはこの鎮守府に私が着任して以来、初めての戦艦だ」
提督「今思うと、色々苦労を掛けたな……」
山城（提督も覚えていてくれたんだ……）
山城「いいえ…！　私はそんな風には思っていません！」
扶桑「私は……私たち姉妹は、提督に貢献できて光栄に思っています……！」

提督「そうか……」
提督「なら、今度の護送任務と大規模作戦の参加、頼めるか？」
扶桑「はい…！」
山城「もちろんです！」
提督「そうか……」

提督「ありがとう、扶桑、山城」
提督（必ず私が、お前たちを守るからな）

◇

山城「二人とも、遅い！」

「あぁっ！　またボクたちをバカにする気!?」

「よ、よしなって…！」アセアセ

山城「な、なによ…！　まだ根に持ってたの…!?」グヌヌ…

扶桑「山城、やめなさい」

山城「あっ姉さままで……！」

山城「……」

山城「不幸だわ……」ムスッ

扶桑「……♪」（ギュッ

山城「……姉さま……」

扶桑「山城、私たちが提督を……」

扶桑「……いいえ、」

扶桑「私たちが、みんなを守るのよ」

扶桑「ね、山城♪」

山城「姉さま……」

山城「……そうですね！」

山城（提督……貴方のことは必ずお守りいたします）

山城（たとえこの命に変えても…！）

「「扶桑、山城、抜錨します!!!」」

……提督
今度の任務が終わったら、貴方に伝えたいことがあります

提督、私たちは貴方の側にいられて、とても幸せです

ありがとうございました。
西村艦隊組は一旦ここまで。
次回は未定